

「失礼します」

ある日の放課後、僕、獅童蓮斗は担任の火鷹瑠唯先生に呼び出されて、生徒相談用の個室に足を運んだ。

一体何の用件かはわからないが、別に嫌ではない。

なにせ、彼女はクォーターだとかですごく美人なブロンドの女性な上に、まだ若くてプロポーションも抜群ときている。

その割にみんなからの人気はそこまででもないのは、堅物で親しみやすすくないその性格のためだろうが。

「獅童くん。ちょっと聞きたいことがあるのだけど」

瑠唯先生は僕を招き入れて椅子を勧めると、机を挟んで自分もその正面に腰を下ろして、話を切り出した。

「実は、あなたが女性を連れて、その……。ホテルに入っていくところを見たという話が、届いているのよ」

僕は、ちょっと首を傾げた。

「心当たりはない？」

「はあ……。そうですねえ……」

僕は曖昧に言葉を濁した。

実際には、心当たりがないわけではなくて、逆にありすぎるのだが。

なにせ僕は、これまでに存在を書き換える能力を使って、大勢の女性を自分の物にしてきたのだから。

ホテルに連れ込んだ女性というだけでも相当な数になるが、一体誰のことだろうか。

「なにかの間違いなら、それで良いのだけど。あなたはまだ学生だから、そういったところを利用するべきでないことはわかるわよね？」

彼女はじっと僕の目を見ながら、話を続けた。

「もし、万が一、なにか心当たりがあるのだったら……」

僕は彼女が諭すように話している最中に、精神を集中させると、『存在の根源の世界』へ入っていった。



世界が切り替わると、僕は目の前にある扉を開けて、瑠唯先生の『存在の部

屋』に入っていった。

「うん、いかにも大人の女性の部屋って感じだなあ」

全体的な部屋の雰囲気を見渡して、僕はそう感想を漏らした。

それから、彼女の存在に関わる基本的で重要な情報の書かれたボードを探し出して、そこに新たな定義を書き加える。

「火鷹瑠唯は、大切な生徒である獅童蓮斗の言い分を信じ、彼の求めることには全力で、教師としての使命感をもって応じねばならない」

「火鷹瑠唯は、獅童蓮斗の質問にはなんでも答える」



元の世界に戻ると、時間はほとんど経過していない。

「心当たりがあるのだったら……先生に話してちょうだい？」

そういう瑠唯に、僕は目を細めて頷いた。

「はい。実を言うと、僕は確かに、女性をホテルに連れ込んだことがあります」

「やっぱりそうなのね。どうして、そんなことを？」

「仕方ないんですよ、先生。だって僕は、年頃の男ですから。女性には人並みに興味もあるし、欲求を抑えきれないことだってあるのは、わかるでしょう？」

僕が言うと、瑠唯は困ったような顔をした。

「……それはそうかもしれないけれど。でも、あなたはまだ学生の身なのだから、そういったことは控えるべきだと思うわ」

「わかっていますよ。じゃあ、先生に協力してはもらえませんか？」

「協力？ ええ、もちろん。何をすればいいのかしら？」

先ほど書き換えてやったとおり、瑠唯は教師としての使命感に燃えて僕の求めに応じようと、真剣な表情になる。

僕はそんな彼女に、にっこりと微笑みかけた。

「先生が、女性に対する僕の男としての興味や欲求を満たしてくれたら、僕は他の女性に手を出さなくてもよくなりますよね？」

「そっ……！ それはもちろん、そうだろうけど……」

瑠唯の顔がみるみると赤くなっていく。

「わ、私なんかで、満足してくれるかしら……？」

「もちろんですよ」

「……わかったわ。精一杯がんばるから、何でも言ってちょうだい！」

とんでもない要求に張り切って答えようとする瑠唯に、僕は内心吹き出しそうになるのを必死にこらえた。

「じゃあ、まずは僕の質問に答えてくださいませんか？」

「ええ、なんでも聞いて。正直に答えるから」

「わかりました。では、早速」

僕はもったいぶって、こほんと咳払いをする。

「僕は、男性の性的な欲求については知っていますが、女性のことはあまりよく知らないの、大変興味があって教えてほしいんです」

そう前置きをしてから、質問を口にした。

「先生は普段、性的にむらむらしたりすることはあるんですか？」

すると、瑠唯は少し恥ずかしげに視線を逸らす。

「……ええと……。ないことはないけれど、あまり口に出すのは憚られるというか……その……」

「大丈夫ですよ。教師として、生徒の真面目な質問に答えるだけなんですから、何も恥ずかしがることはありません」

そう言って促すと、瑠唯は頷いて、ぼそぼそと話し始めた。

「うう……。えっと、その……私は、男性との交際経験はないのだけれど……」

「はい。それで？」

「……自分で慰めたりは、たまにするわ」

「なるほど。ちなみに、どういうときにするんですか？」

「どんなときって……。……夜寝る前にベッドの中でとか、あとは、お風呂に入っている時とか……」

「する頻度は？ そのときには、どんなことを思い浮かべてするものなんですか？」

「……。週に一回くらいかな……。それで、そのときに想像するのは、男の人の裸と、か、身体が触れ合ったときの感触とかを、思い出して……」

「なるほど、とても参考になります。ありがとうございます」

僕はそう言って、にこやかに笑ってみせた。

「ええと、男の人の裸や触れ合った感触を思い浮かべるんですよね。じゃあ、もしかして僕の裸とかにも、興味があったりします？」